「奴隷から王へ」

目次

(1)　ウントゥン・スロパティ……2
(2)　音写と翻字……4
(3)　奴隷の本質は身分？……6
(4)　女奴隷ロッシーナ……8
(5)　奴隷がアモック……10
(6)　盗賊から軍人に……13
(7)　運命の女性との邂逅……15
(8)　ツキを招くウントゥン……17
(9)　マタラム王宮の内紛……19
(10)　VOC 脱走軍人……21
(11)　カルトスロを落ち延びる……23
(12)　パスルアンの王……25
(13)　トゥムングンウィロヌゴロ……27
(14)　めぐり逢い……29
(15)　ロバートの葛藤……31
(16)　父子の絆……33
(17)　全軍スラバヤ終結……34
(18)　ウントゥン被弾……37
(19)　ウントゥン死去……39
(20)　反オランダ闘争の先駆者……40

「奴隷から王に（１）」（2023年08月08日）

１887年、Van Slaaf Tot Vorst と題するオランダ語の小説が発表された。著者は１853年にスマランで生まれたオランダ女性ニコリナ・マリア・クリスティナ・スロートであり、この小説にはジャワのジャスミン Melati van Java という筆名が使われた。かの女は１８年間スマランで娘時代を過ごし、その後オランダ東インドに関する文筆活動を開始して世間に名前の知られた人物だ。

Nicolina Maria Christina Sloot

この作品はジャーナリストのFHヴィガースによって Dari Boedak Sampe Djadi Radja というタイトルでムラユ語に翻訳され、１898年に出版されている。ヴィガースはヨーロッパ系の東インドプラナカンであり、オランダ東インドの文学を世の中から掘り起こす先駆者として活躍した人物だ。

FHヴィガースは１906年に発足した初期の東インドジャーナリストの職業団体であるマレイシュジュルナリステンボンドの副会長を務めたジャーナリスト界の大物だ。ジャーナリストに転身する前は東インド政庁の官僚として監視官の職務に就いていた。

ヴィガースが使ったムラユ語は bahasa Melayu Rendah と呼ばれている、非ムラユ文化地方で一般に使われているムラユ語だった。オランダ人が正統言語と規定し、東インドの共通語にするために文法や語法をアカデミックに編成し直したムラユ語はリアウ地方のムラユ語であり、こちらは bahasa Melayu Tinggi と呼ばれた。

しかしジャワ島の都市部でひとびとが日常接しているムラユ語は低ムラユ語なのであり、かれらが読み書きし、また感情や言語感覚を盛り込んで使うためにはその方が使いやすく、そして解りやすかった。１９

世紀末近くになって華人が盛んに文筆活動を行うようになったとき、かれらはたいていが慣れ親しんだ低ムラユ語を使って作品をものしたから、世の中には、少なくともジャワ島内では、低ムラユ語が高ムラユ語を押しのけて圧倒的にポピュラーな実用言語になった。

そのころまで華人が書く作品は、華人向けの中国語、あるいは西洋人とプリブミ知識層向けのオランダ語で書かれるものがほとんどだったにもかかわらず、かれらは一転して低ムラユ語でプリブミ中間層にまで行き渡る作品を書くようになっていったのである。

高低ムラユ語間の軋轢がなかったわけでは決してない。高ムラユ語は行政統治者が肩入れする政策言語なのだ。低ムラユ語はアカデミックなクオリティに欠ける野卑な言語であるというコメントが教育文化行政筋から出されることはしばしば起こった。それは同時に、作品のクオリティに対する評価の中にも混じり込んだ。この作品のクオリティは野卑なものだという批評をオーソリティが表明したなら、読む気をなくす読者も出るにちがいあるまい。

このヴィガースの翻訳作品の流通期間が比較的短かったのはそのせいではないかという現代文学界のコメントがある。その時代の文芸批評は純粋に文学的な内容だけに焦点が当てられたものでなく、このような使用言語のバリエーションに対する政策的な意向が入り混じった複雑な性質を持っていたと言うことができるだろう。

だが最終的に社会は、低ムラユ語という術語を bahasa Melayu Pasar という受け入れやすい名称に替え、アカデミック性よりもポピュラー性を支持して統治者の政策を瓦解させたのである。インドネシア語という言語の歴史的な流れを見る場合、青年の誓いを経て新しい民族の国語が作り上げられていくプロセスの根底に置かれていたのはこのパサルムラユ語であり、リアウ地方の純粋ムラユ語あるいは高ムラユ語ではなかったと考えるほうが当たっているのではないだろうか。

ニコリナ・スロートのその小説は史実を踏まえた創作というよくあるタイプの歴史小説だったようだ。その主人公がウントゥン・スロパティである。17世紀後半から18世紀初期の時代に生きたウントゥン・スロパティは、奴隷から身を起こして地方に独立国を打ち建て、王になった。[続く]

「奴隷から王に（2）」（2023年08月09日）

オランダ語原本もヴィガースの翻訳版も、Oentoeng Soerapati とその名が綴られているが、現代インドネシアでは Untung Surapati または Untung Suropati と綴られる。そのいずれにせよ、オーセンティックな発音はウントゥン・スロパティであってスラパティではない。なぜなら、バリ人として生まれたこの人物は生涯の大部分をジャワで送り、かれの個人名になったスロパティという言葉もジャワ語の名前がかれに与えられたものだったからだ。

ジャワ語は元々、ホノチャロコあるいはチャラカンと呼ばれるジャワ文字で書かれていた。そのジャワ文字が読めないひとのために、原文をアルファベットに移しかえる翻字プロセスが行われた。翻字とは、対応する文字が固定されて文字だけを書き換えるプロセスになるのが普通だ。そのために、原語の文字と音の間にバリエーションがある場合、それはそのままアルファベット表記の中に持ち込まれることになる。翻字が音をアルファベットで書き写す音写でないため、当然発生する弱点だろう。反対に音写が行われると、オーセンティック[1]な原語の文字表記が判らなくなる単語が出現し、辞書で意味を探すことが困難になりかねない。

アルファベット翻字されたジャワ語の「a」はオに近いアと普通のアという異音を持っていて、単語もしくは音節のつながりの中でそのどちらの音を発音するのかが決まっている。Surapati の正しいジャワ語発音はスロパティになっているのだ。このメカニズムがややこしい現象を生んだ。

[1] 「本物の」「正統の」

Surapati や Trunajaya のようなジャワ語の固有名詞がインドネシア語の中で使われたとき、何が起こっただろうか？インドネシア語の「a」の音はアただひとつであり、インドネシア語文に書かれたそれらのジャワ語固有名詞もスラパティやトゥルナジャヤと読まれる現象が当然の帰結として起こった。

その現象に対して逐一、スロパティやトゥルノジョヨという正しい発音に訂正させきれなくなったとき、ジャワ語の発音を音写してイ＿ア語[2]化し、Suropati や Trunojoyo と綴る動きが発生した。つまり世の中に同一の内容を示す単語が二種類流通するようになったのである。そうすることで読み方の問題は解決したのだろうか？それが徹底できるのは全体主義国家だけではあるまいか。

世の中のインドネシア語文の中に二種類の綴りが流通してしまったものを、古い過去までさかのぼってイ＿ア語文中のジャワ語綴りをイ＿ア語綴りに書き直すことなど誰が行えようか？そして過去に書かれた文書に二種類の綴りが出現しているのだから、全体主義国家の帝王が国民に罰則付きで音写綴りを強制しないかぎり、国民のひとりひとりがどちらかの綴りを使うことになるだろう。

こうしてイ＿ア語の中では、同一ジャワ人の名前やジャワの地名[3]に二種類の綴りと二種類の発音が並立するものがあるという現象が確立されることになり、その格好で現在に至っている。

外国語単語のカタカナ表記も似たような問題をはらんでいるようにわたしには思われる。たとえば英語をはじめ西洋語の単語はマジョリティ日本人が原語発音を音写しようと努めているように思われるのだが、インドネシア語に関してはどうも翻字をするひとがかなりの比率を占めているように見えるのである。

デヴィ夫人やデビ夫人も、大昔に流行ったジャゴラビも、わたしには音写した結果だとは思えない。原語の音を捉えようとせず、文字を移し替えた結果ではあるまいか。Dadih をダディヒと書くのも語尾の単なる吐息を吐息として扱わず、綴りを翻字しているように思われるのだ。

---

[2] インドネシア

[3] 例:正式には Yogyakarta(ヨグヤカルタ)であるがオランダ式表記では Jogdjakarta なのでジョクジャカルタとも呼ばれている

さるネット地図サイトで、地図に書かれているたくさんのイ＿ア語地名が米語風の発音でカタカナ書きされている現象に遭遇して、唖然とした記憶がわたしにある[4]。欧米語に適用される傾向の高い原語の音写に逆行するようなそれらの翻字現象が、インドネシアに関してだけ行われているものなのかどうか、他の発展途上国と考えられている国々がどうなっているのか、わたしには興味のあるところだ。[続く]

「奴隷から王に（３）」（2023年08月10日）

１684年のできごとが小説「奴隷から王に」の幕開けだ。そのとき奴隷の身分ではあってもVOC軍の士官としてプリブミ兵士の部隊を指揮するようになったウントゥンは、グデ山系の中に逃げ込んだバンテンスルタン国の王子パゲランプルバヤを連れ帰るために部隊と共に捜索行の途上にあった。

パゲランプルバヤはVOC軍との戦争に敗れて落ち延びたのだが、結局VOCに降伏することを決意してVOCに投降を表明した。ただしその書状には、VOC軍のプリブミ士官に指揮された部隊が自分を迎えに来るようにと記されていた。その仕事がウントゥンに命じられたのである。

ウントゥンはそのころ、自分がオランダ人に受け入れられてヨーロッパ人のような待遇が与えられることを切望していた。かれの熱愛する娘と正式に結婚して家庭を築き、普通の社会生活を送ることが大きな憧れになっていたのだ。ヨーロッパ人の都市国家バタヴィアで暮らすためにはそれが絶対条件になる。かれの熱愛する娘スザンナはバタヴィアに住むヨーロッパ人だったのだから。

ウントゥンがその生涯を賭けて愛したスザンナは、ウントゥンに関するインドネシア語情報の中でたいてい Suzane と書かれているが、ニコリナ・スロートは Suzanna と書いている。

---

[4] Google map では東ジャワ州の Nganjuk をヌガンジュクと表記しているが、この発音では現地で通じない。現地の発音をカタカナで書くとガンジュッ。但し最初のガは鼻濁音。

ウントゥンはスザンナの父親が買った奴隷だった。ところがスザンナと愛し合う仲になり、夫婦の契りを交わしたのだ。娘が奴隷と男女の仲になったことを知った父親は怒り狂った。スザンナはプラウスリブ[5]のひとつの島に隠され、ウントゥンはバタヴィア市庁舎地下の牢獄に送り込まれた。

ウントゥンは牢獄内で仲間を作り、脱獄計画を練って実行した。スザンナがその計画に手を貸したという説もある。脱獄に成功したウントゥンと仲間たちはバタヴィアの外を囲んでいるジャングル内を棲み処にして、強盗仕事で稼ぐようになった。

バタヴィアの住民人口はこの都市国家が作られて以来、大半が奴隷で占められた。奴隷の持ち主はたいてい奴隷を非人道的に扱い、反抗的な奴隷は簡単に牢獄送りにした。だからご主人様が自分を虐待するような雰囲気が出始めると、奴隷は機を見てあっさり逃亡した。

バタヴィア城市の外はジャングルであり、人間を食い殺したり毒殺する野生動物があふれている。しかしそんなものがかれらの逃亡を抑止することにはならなかった。かれらは先に逃げた逃亡奴隷たちが集まって暮らしている場所に行ってその仲間になった。逃亡奴隷たちは強盗団や略奪団になって、バタヴィア城市の外に出て来る人間や城市の外で運営されている資産を襲った。

この奴隷という言葉から、奴隷制時代の奴隷のすべてが残虐な扱いを受けて悲惨な人生を送ったという深刻なイメージを持たなくてもよいのではないかとわたしは思う。奴隷の中にはご主人様と和気あいあいの生活を営み、与えられた仕事を上手にこなして信頼を獲得し、主人の一家から忠実な下僕として慈しまれながら一生を終えた者も少なくなかったのではないだろうか。あるいは子供の奴隷が主人の息子の付添い人の仕事を与えられ、主人がふたりをまるで兄弟のように扱い、ふたり仲良く育つといった例もあったような気がする。もちろん、そんなことは主人次第の問題になるわけだが。

奴隷というのは社会制度の中に作られた身分という性質が強く、制度それ自体と人間同士の接触はまた別物であったのではないかとわたしには思われる。奴隷は私物なのだから虐待してもかまわないという

---

[5] バタヴィア(今のジャカルタ)の北方にある小島からなる諸島

のは身分のほうにくっついている側面であり、自分の私物を粗末に扱うか大事に愛でるかは持ち主の人間性の問題になるような気がするのである。

奴隷を買って所有するというのは、ある意味で住み込みの使用人を持つのに似ているのかもしれない。だから奴隷が主人に対等な口をきいたり、主人を非難するといったことも起こり得ただろうし、自分の非を奴隷に批判されたのを受け入れる度量を持つ主人もいたことだろう。とはいえ、自分に非があっても奴隷身分の者が何を僭越な、という感情が先に立ってそんな奴隷に暴力を振るう主人がいたのも当然の話だ。

[続く]

「奴隷から王に（４）」（2023年08月11日）

マナド人FDJパゲマナンが１903年に発表した「ロッシーナ物語」[6]も奴隷の境遇を浮き彫りにして描き出した作品だ。この物語はバタヴィア城市から住民がヴェルテフレーデン、モーレンフリート、ガンビル[7]などに移り住むようになったころの時代のできごとで、バタヴィア城市西岸地区のロアマラカの大邸宅に住むファン・デル・プルフ家が舞台になっている。主人のトアンファン・デル・プルフは大金持ちの高貴な家系であり、高い地位に就いていた。

オランダ東インドでは１854年法律第２号で奴隷制の廃止が定められ、１860年１月が実施のデッドラインとされた。しかしそのデッドラインを越えて長い期間、奴隷たちは奴隷だったころと同じような生活をしていたと言われている。

この話が、もしも奴隷というのが身分についてのことがらでしかなく、実生活面では人間的な扱いを受けるその家の使用人であった場合、奴隷という身分から解放されたとしてもその家を去って新たな職業に就かねばならない理由にはならないだろう。奴隷の主人にとっては、無給の使用人が有給の使用人に変わ

---

[6] “Tjerita Rossina” by FDJ Pangemanan

[7] http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/Kawan-27Weltevreden.pdf

るだけの話なのではあるまいか。だから外見的に、その家の中では従来の奴隷たちが有給の使用人に変わっただけで、かれらの生活様式に何の変化も起こらなかったように見えても、決しておかしくない気がする。

　１８世紀末から奴隷制廃止の気運が世界に立ち昇りはじめたのを横目に、オランダ東インドでは遥か古くからバタヴィア城市内に奴隷市が立ち、海を越えて運ばれてきた奴隷が買付人に買われてまた海を越えて散らばって行くという現象が相変わらず続いていた。ロッシーナ物語の時代も、バタヴィアに住む白人で奴隷を持たない家はなく、邸宅の大きさに応じて数人から数十人という奴隷がどの家にも置かれていた。ファン・デル・プルフ家はその数十人の方に属している。

　女奴隷の中に、まだ１５歳のバリ娘ロッシーナがいた。色白の肌に長い黒髪を垂らしたたいへん美しい娘で、街中を歩けば決まって男たちが振り向いた。奥様はとてもこの娘が気に入り、どこへ外出するにも必ず一緒に連れて出た。そんなときロッシーナは腰までのバジュクルンとバティックのカインに身を包み、衣服を止めるピンやかんざしにはきらめく宝石の散りばめられたものが使われ、かの女を目にする男も女もロッシーナの美しさをほめそやした。奥様は自分の持物のすばらしさをみんなにほめられて、大いに自尊心をくすぐられたにちがいあるまい。

　だがロッシーナの女が開花しはじめたとき、奥様の心に不安が湧いた。夫がこの娘の身体を欲しがるだろうという嫉妬だ。その対策をどうするか？奥様には考えがあった。ロッシーナを結婚させれば、夫は人妻にまで手を出すこともあるまい。奥様は夫の性格をよく知っていた。

　醜男で老齢にさしかかっている奥様付きの男奴隷アポルとロッシーナを奥様は夫婦にさせることにした。ロッシーナの心には気にかかっている若い男の姿があったのだが、奥様が仕組んだこの結婚に異論を唱えることなどできるはずもなかった。一方、アポルはロッシーナを目にするたびに起こる疼きが満たされることになったのを大喜びで受け入れた。こんなことになるとは夢にも思っていなかったロッシーナは自分の非運を甘んじて受け入れたものの、それ以来誰もいない場所を探しては涙にくれるようになった。

ある日の午後、奥様はまだ小さい息子の泣き声に午睡の夢を破られた。不十分な眠りのためにご機嫌斜めになっている。何が起こったのかを見に裏へ行って奴隷のひとりに尋ねると、坊ちゃまが転んだからだと言う。誰が付いていたのかを尋ねると、ロッシーナだという返事が戻って来た。奥様はロッシーナを呼びつけた。

そしてロッシーナの説明も聞かずに腹立ちをロッシーナに向けて折檻し始めた。ロッシーナの手を台に置かせてかんざしで突き刺す。「赦して下さい」と泣き叫ぶロッシーナを捕まえておけと他の奴隷に命じて奥様は部屋に戻り、灯油を浸した布とろうそくを持って戻って来た。そしてロッシーナの手にその布を巻きつけてからろうそくで火をつけた。

痛みで転げまわるロッシーナの悲鳴に起こされたご主人様がやってきて現場を見るやいなや、すぐさまロッシーナの手を焼いている布を取り去り、水をかけて冷やした。夫婦喧嘩が始まる。ロッシーナを心配してやってきたアポルは外に隠れて様子を窺っていたが、逃げ出してきたロッシーナを迎えてだれもいない場所に連れて行き、介抱した。[続く]

「奴隷から王に（５）」（2023年08月14日）

その時代、アンチョル[8]の土地は金持ち層がピクニックに出かけて土いじりをしたり自然の中で遊ぶために、区画されて売買されていた。持ち主はたいていそこに小屋を建て、遊びに行ったとき、その小屋を拠点にした。

たいていは簡素な小屋だったが、その中に立派なヴィラが一軒あって、表門の上に黄金色の星型が付けられていたために Bintang Mas と呼ばれていた。それはファン・デル・プルフ奥様の両親が娘に遺した遺産だった。このビンタンマス荘がウイ・タンバッシアの物語[9]に出て来るものと同じだったのか、それとも別物

---

[8] ジャカルタ市の北海岸地域で現在は Ancol 公園になっている。

[9] http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/73Asian-in-Nusantara.pdf P111

なのかよく判らない。

ある日、奥様が子供たちを連れてそこに遊びに来た。ご主人が後から来ることになっていたのだが、夕方になってもまだ来ない。それでご主人に手紙を書いてアポルに届けさせた。そうしてから奥様と子供たちは夕食前のひと眠りに就く。

奥様が寝ている間にロッシーナは川で水浴するために外に出た。川で水浴していると、かの女の心に姿の焼き付いているジョヨがやってきて、自分の故郷のジュパラ[10]に行って一緒に暮らそうとロッシーナを誘った。ロッシーナは迷ったが最終的にそれを受け入れ、ビンタンマスに戻って自分の荷物を持ち、行き掛けの駄賃に奥様が寝ている部屋の机に置かれている高価な宝石付き装身具をかき集めて逃げ去った。

アポルはご主人の手紙を持って戻って来た。そして妻のロッシーナを探したが、どこにもいない。他の奴隷たちもみんな、知らないと言う。ひょっとして、自分のいないときに奥様がまた折檻したのではないか。殺して死体をどこかに捨てさせたのかもしれない。アポルの疑心暗鬼が憤怒を招いた。赦せない！アポルは奥様と対決する決心をした。

「奥様、ロッシーナはどこです？」

「はあ？わたしが知ってるわけないじゃないの。自分で探しなさい。見つけたら、自分の背中にでもくくりつけたらどう？」

「どこにもいないんですよ。ひょっとしたら逃げたのかもしれない。奥様のせいだ。」

「逃げた？逃亡奴隷がどんな罰を受けるか、あの子だって知ってるはずよ。逃げたとは思えない。多分この区画のどこかで他の若い男と抱き合ってるんじゃないの？猿どもはあの子を見るとみんな尻尾を振り立てるから。」

アンチョルの猿を引き合いに出されて妻を侮辱されたアポルは怒りが天を衝いた。

---

[10] 中部ジャワ州スマラン市から東北に約 50km に位置する家具で有名な都市。

「奥様がロッシーナを憎んで折檻したからこんなことになったんだ。奥様のせいだ。」

「おまえはわたしが悪いって言うのかい。身の程をわきまえなさい。自分の妻を探すんだったら、こんなとこにいないで探しに行きなさい。わたしにぐずぐず言いがかりをつけるんだったら、外の木におまえをしばりつけて鞭打ち10回の罰を与えるからね。」

アポルは部屋から走り出たが、すぐに鉈を持って戻って来るなり奥様に斬りつけた。奥様は死体になった。そばにいたふたりの子供もアポルの怒りから逃れることができなかった。三つの死体が転がり、アポルはそのままビンタンマスを走り出た。ちょうどそこにトアンファン・デル・プルフが馬車でやってきた。馬車から降りたトアンにアポルは鉈を振るって攻めかかる。身をかわしたトアンは血だらけのアポルの姿を見て何が起こったのかを察した。アポルがアモックを起こしたのだ。

トアンはアポルを捕まえて鉈を取り上げ、他の男奴隷たちにアポルを抑えさせて自分は邸内に入った。そして妻と子供たちの死体を目にして、トアンはショックに襲われた。

そのころアポルは自分を抑えていた男奴隷たちの手を振り切ると、アンチョル川目がけて走った。数人が逃がしてなるものかと後を追う。しかしアポルは頭から川に飛び込んで、向こう岸目がけて泳いだ。追手の中の泳げる者も飛び込んだが、既に距離が開いてしまっていた。アポルは向こう岸に上がると、闇の中に姿を消した。

ご主人様を殺して逃亡奴隷になったアポルは、バタヴィア城市外の山野に潜伏する盗賊団に入ったか？多分かれの時代は既に昔のころから変化していたのだろう。アポルは歩きに歩いてクバヨラン地区の丘陵にたどり着いた。そのエリアに貧しい家が一軒あった。腹をすかして木の下で休息しているアポルを憐れんで、その家の主がかれを食事に誘った。

その家に住んでいる農夫は畑作をして暮らしている。アポルは数日間そこに滞在し、畑仕事を手伝って懇切丁寧なしごとぶりを示したから農夫は喜んだ。いつまでもここにいていいよとアポルに言い、一緒に農

作業を行うようになったのである。

さて、盗賊団の首領になった逃亡奴隷のウントゥンはどうなったか？[続く]

「奴隷から王に（６）」（2023年08月15日）

一緒に脱獄した仲間たちと共にかれは各地を転々とした。あるとき、かれらはチルボンスルタン領にやってきた。そこでスルタンの猶子であるラデンスロパティの配下とウントゥンの仲間が衝突した。すさまじい集団喧嘩になってウントゥンの仲間のひとりが殺された。これをラデンスロパティとウントゥンの間の当人同士の衝突と書いている話もある。

街中で起こったその騒ぎはスルタンの兵隊がやってきてすぐに鎮め、裁判にかけるために双方をスルタンの前に引き据えた。双方が原因を説明したが、互いに相手を悪者にするのが当たり前だ。ところがさまざまな説明をする中で、ラデンスロパティの話に矛盾が出てきた。最初にスロパティが説明した内容に嘘があるのが判明したのだ。スルタンはスロパティに死刑を宣告した。

スルタンは自分の猶子が犯した悪事をウントゥンに詫び、スロパティの名前はあなたのほうにふさわしいものだと言ってその名をウントゥンに与えた。surapati とは「神の王」を意味する言葉なのだから、チルボンのスルタンがウントゥンに好感を抱いたことがそこから見えて来る。

ウントゥンの名はかれが奴隷時代に主人から与えられた名前であり、チルボンに来てスロパティの名をもらったことで、かれはウントゥン・スロパティを名乗るようになった。そうやって各地を転々としながら、ウントゥン・スロパティ盗賊団はカラワンに入った。

バタヴィアに隣接するメステルコルネリス（今のジャティヌガラ）からブカシを抜けて80キロほど東にカラワンがある。カラワンのチタルム川沿いに1678年、VOCはタンジュンプラ要塞を設けた。それがバタヴィアの遠隔地にジャワ島で最初に作られた要塞とされている。

名前は要塞だったが軍事上の防衛能力はあまり重視されておらず、VOCが現地統治を行なうための拠点として、地域の保安・商品輸送の便とその安全・地域の警察と裁判などの諸機能を担うセンターとして使われた。翌1679年にタンジュンプラのパティが攻撃をかけたために、タンジュンプラ要塞は焼け落ちている。

VOC内ではより防衛能力の高い施設に建て直す話になったものの、建て直された建物は以前と同じようなものでしかなく、だいぶ経ってから1712年に、先端をとがらせた太い丸太を垂直に立てて敷地内を取り囲む工事がなされただけだった。

1749年になってやっとレンガ作りの要塞に建て直され、1802年には対イギリス戦に備えて要塞としての軍事機能がさらに強化された。ところが対イギリス戦の準備を行うために赴任して来たダンデルス総督がこの要塞を軍事拠点のリストから抹消したのである。こんな所に小人数の兵力を置いても何の役にも立たないということだったのだろう。

1811年にはそこの土地建物の売却が命じられ、翌年に売却された。そして購入者は1813年に要塞施設を取り壊してしまったのである。今では、タンジュンプラ要塞があった場所は多分ここだろうという話が

なされているだけだ。

タンジュンプラ地区で域内の保安と秩序の任に当たっている駐屯VOC軍とウントゥン・スロパティの盗賊団がトムとジェリーの関係になったのは当然の帰結だった。ところがタンジュンプラ要塞部隊指揮官ライス大尉が盗賊団の首領の人柄に興味を抱いたのだ。優れた度胸と才覚、巧みな闘技、鮮やかな戦術。オランダ語を流暢に話し、西洋的センスを身に着けたプリブミの悪党とくれば、指揮官が戸惑うのも当然だったにちがいあるまい。この男を敵に回して殺し合うよりも、VOCの中に引き入れて進歩と発展のために働かせるほうがはるかに有意義ではないだろうか。

ウントゥンにとっても、それは良い話だった。スザンナとの人生を夢見ているウントゥンにとって、オランダ人社会の中で生きることはその実現に向かうための絶好の近道になるはずだ。VOC軍の一士官として自由人の身になり、軍営の中で住居を持つことができれば、スザンナの父親もわれわれを正式に結婚させてくれるだろう。そうすれば愛しい妻と家庭を築き、子供たちを育てて・・・[続く]

「奴隷から王に（7）」（2023年08月16日）

ウントゥン・スロパティ盗賊団は一転してタンジュンプラ要塞駐屯軍に所属し、オランダ式の軍事訓練を受けて優れた戦闘部隊に変身した。それを指揮するウントゥンには少尉の階級が与えられた。ウントゥンは自分の忠実さをオランダ人に認めてもらいたいために、軍務の遂行に励んだ。オランダ人と接触するときでも、かれらの言いなりになって良き弟分と遇されるように努めていた。オランダ人の気に入られる人間になることがその時期のかれの目標だったにちがいあるまい。

タンジュンプラに誕生したこの「プリブミ士官に指揮されたVOC軍部隊」はパゲランプルバヤが要求した内容にぴったりではないか。

パゲランプルバヤを連行して来る命令を受けて、ウントゥンの部隊はカラワンからおよそ百数十キロの行程にあるグデ山系に向けてタンジュンプラ要塞を出た。かれらは山中で密林の中を抜け、道なき道をたどってついにパゲランプルバヤの居所を探し当てた。パゲランプルバヤは迎えに来たウントゥンの部隊に身を委ねてタンジュンプラへの道に足を踏み出す。ところが、タンジュンプラに戻る途中で別のVOC軍部隊がかれらの行く手を遮ったのだ。ファンドリッヒ・クフェラーの指揮する部隊が獲物を横取りして手柄にしようとしたのである。

オランダ人に強要されたウントゥンは仕方なくパゲランプルバヤとその家族一同を引き渡した。横取り者はウントゥンが逃亡奴隷であるという弱みをことさら大げさに言い立て、しかも白人社会における白人上位をかさにきてそれを行ったのだろう。しかしウントゥンにあったのは、スザンナとの人生のためにオランダ人に気に入られてかれらに仲間扱いしてもらおうとする弱みだったのだが。

ともあれ、横取り者がパゲランプルバヤと家族たちをまるで動物のように手荒に扱う様子を見て、ウントゥンの怒りが炸裂した。１６８４年１月２８日、ウントゥンの部隊はチカロン川でクフェラー部隊に襲いかかり、２０人のオランダ人の死体が後に残された。

そのできごとのために、ウントゥン部隊がパゲランプルバヤをタンジュンプラに護送することができなくなった。そのとき、パゲランプルバヤの妻のひとりで Kartasura[11]王宮出身のラデンアユグシッ・クスモが自分を実家に送るようウントゥンに依頼したのだ。グシッ・クスモはカルトスロの王族であるパティ、ヌランクスモの娘だった。ニコリナ・スロートは小説の中でヌランクスモをアミラン・クスモと呼んでいる。ウントゥンとかれに従う部下たちはカルトスロを目指すことにした。パゲランプルバヤとかれの他の家族はタンジュンプラ目指して進んで行った。

グシッ・クスモはクフェラー部隊が出現してから起こったできごとをつぶさに目にし、ウントゥンの複雑な

[11] 「カルトスロ」と読む。ここはスラカルタ市の西側に接し、ジャワの王家がヨグヤカルタとスラカルタに分解する前まで王宮があった。

行動に疑問を抱いた。最初はオランダ人の言いなりになる腑抜けのプリブミ士官と思ってかの女はウントゥンを軽蔑した。グシッ・クスモは筋金入りのオランダ嫌いだったのだから。

ところが捕虜を手荒に扱うオランダ人の態度によってウントゥンの姿勢が一変した。だったらどうして最初からもっと突っぱねようとしなかったのだろうか？カルトスロを目指す旅の中でウントゥンという人物の人間性に触れれば触れるほど、グシッ・クスモの心中に謎が膨らんでいった。ウントゥンのような知性とバランス感覚に優れた男がどうしてオランダ人の前でそれほどまでに弱気になるのだろうか。

オランダ人に憧れてオランダ人になりたがっているプリブミ？そんな姿勢は間違っているし、そんな考えで人生を送っているこの男は間違った人生を生きることになる。カルトスロ目指して進む旅の中で、グシッ・クスモはウントゥンの人柄に触れて恋に落ちてしまったようだ。自分がこの男の人生を正しい道に向かわせなければならない。そのときグシッ・クスモは自分の運命をそこに見たのではあるまいか。自分のこの人生はこの男のためのものであったのだと。[続く]

「奴隷から王に（８）」（2023年08月18日）

そんな女が自分の身近に出現したことを気にもかけず、ウントゥンはいまだにスザンナとの人生に夢を託している。クフェラーのおかげでまた夢を手に入れるための扉が閉ざされてしまったが、いつの日かきっと・・・

しかし夢見る日がかれを訪れることはなかった。薄幸のスザンナは失意のうちに世を去り、かの女が産んだウントゥンの子はヤコブ・ファン・レインが養子にした。ロバートと名付けられたウントゥンの最初の子供は成人してVOCの軍務社員になり、兵士としての日々を送るようになった。

そしてロバート・ファン・レインはディグナ・タックと恋仲になる。ディグナは１６８６年にカルトスロでウントゥンに殺されたタック大尉の娘だった。だがふたりはロバートがウントゥンの子供であることを露知らない。

そのことよりも、ふたりの間に破局が訪れたのは、ヤコブ・ファン・レインの死去によって自分の出生の秘密をロバートが知ったからだった。自分がファン・レイン家の実子でなく拾われて育てられた子供であり、自分の肌の色が西洋人のようでないのは本当の父親が西洋人でなかったからだ。

家族と共に海を渡って訪れたオランダをロバートは自分の祖国と信じ、三色旗の旗の下でわが祖国に忠誠を誓い、自分のアイデンティティとしてそれを絶対視していた。ところが自分の血統が純粋オランダ人でないという事実がそんなロバートを打ちのめした。心の動揺に耐え切れず、かれはすべてを捨てて家を飛び出し、行方知れずになった。ディグナもスザンナと似たような立場に立たされたようだ。

インドネシア語ウィキペディアの解説によれば、ウントゥン・スロパティは1660年にバリ島のゲルゲルで生まれた純粋のバリ人でヒンドゥ教徒だった。元々の名前はスラウィラアジである。

ジャワ年代記に記されたウントゥン・スロパティの物語では、バリの将軍の息子に生まれたスラウィラアジが親とはぐれ、その子をマカッサル駐在のVOC士官ファン・ベベル大尉がバリ島で手に入れて別のVOC士官に売ったところからウントゥンの履歴が始まっている。そのときウントゥンは7歳だった。

身柄を売り買いされるのだから、つまりは奴隷ということになるだろう。この奴隷の少年は一度持ち主が替わってから、最後にファン・モール大尉の奴隷になった。スザンナの父親がこのファン・モールだ。この奴隷の少年を身近に使うようになって以来、ファン・モールは地位と財産が目に見えて向上するようになったのである。この少年がツキをもたらしたと考えたファン・モールは、かれをウントゥンと呼ぶようになった。

しかしファン・モールのウントゥンは最後にとんでもない災厄をもたらす疫病神になって終わった。娘のスザンナに憑りついたのだから。そのときウントゥンは20歳だったとウィキは述べている。

ウントゥンがファン・モールの疫病神になったのも当然で、ファン・モールが好運をもたらすヤツと自分で言いながらウントゥンには再三ひどい仕打ちをしていたそうだから、ゼロサムにならなければ収まらなかったのではあるまいか。ウントゥンは成長するにつれて自分につらく当たるトアンに反抗的になっていったそうだ。ただしウントゥンとスザンナの恋愛が父親への仕返しのためだったのかどうかは良く判らない。ニコリ

ナ・スロートの小説では純愛として描かれているのだが、インドネシアの国家英雄に祭り上げられたウントゥンの本質を偉大なる反植民地主義者と定義付けたいひとびとは、かれをその座に導いたグシッ・クスモをウントゥンのベストパートナーと考えたいだろう。[続く]

「奴隷から王に（９）」（2023年08月21日）

イ＿ア語ウィキペディアのこのウントゥン・スロパティのページにまだ若いウントゥンの肖像画が貼られていて、ピーテル・クノルとコネリア・ファン・ネインローデ[12]の使用人時代という説明が添えられている。この絵は１６６５年にヤコブ・ヤンセンス・クーマン[13]が描いた有名なピーテル・クノルとコルネリア・ファン・ナイエンローデ夫妻の家族肖像画の一部であり、ウントゥンはコネリアのすぐ後ろに立っている。

Pieter_Cnoll,_Cornelia_van_Nijenrode_en_hun_dochters_Pieter_Cnoll._Eerste_opperkoopman_te_Batavia,_zijn_echtgenote_Cornelia_van_Nijenroode_en_hun_dochters_Catharina_(geb._1653)_en_Hester_(geb._1659),_SK-A-40

[12] 父親は平戸商館に勤めるコルネリスで母親はスリシア(鶴)。ジャガタラお春という名で知られているジェロニマお春とともに国外追放となり 1640 年 1 月にバタビアに着いた。

[13] Jacob Koeman

ヤコブ・クーマンは1663年にオランダからバタヴィアに移り、1676年に没するまでバタヴィアで高官たちの肖像画を描き続けた純血オランダ人画家である。

コネリア奥様もファン・デル・プルフ奥様のように粗相した奴隷を折檻したのだろうか？日本語でコルネリア・ファン・ナイエンローデと書かれているオランダ語綴りは現代オランダ語での発音がコネリア・ファン・ネインローデと聞こえるので、わたしはそれを音写していることをお断りしておきたい。古オランダ語の発音が検証できれば一番よいのだが、調べ方がよくわからない。

コネリアの家族肖像画に描かれている人物がウントゥンであるとすれば、ウントゥンは1660年生まれとなっているのだから、その家族肖像画が描かれた年にはまだ5歳だったのではないだろうか。しかしどう見てもその画像の人物が5歳であるようには見えない。ウントゥンがいつからファン・モールに使われるようになったのかがはっきりしないのだが、ファン・モールはピーテルとコネリアの夫婦からウントゥンを買ったのだろうか？何かがおかしいように思われる。

タンジュンプラに戻らず、そのままカルトスロに向けて東進したウントゥンの部隊はVOC軍に追われる立場になった。味方の部隊を攻撃して滅ぼし、そのまま逃げたのだから、軍規違反であり、謀反人になる。

タシッマラヤのラジャパラ村に達したとき、ヤコブ・クーペ率いる追跡部隊が追い着いた。投降して軍の裁判を受けろという追跡部隊指揮官の説得を聞き入れる者はウントゥン部隊にひとりもいなかった。公平な裁判など期待できないということだったのかもしれない。クフェラーもどきが裁判官の座にすわったら、それだけで判決は決まったようなものだろう。

戦闘が展開されて、ウントゥン部隊はVOC部隊を粉砕した。これでウントゥン部隊は完全にVOCの敵になったことになる。一行はカルトスロへの進軍を続けて、グシッ・クスモを無事にパティの宮殿に送り届けた。娘が無事に戻ったことをヌランクスモはたいへん喜び、ウントゥンとその部下たちを重要な客人として邸内に迎え入れた。

ヌランクスモはカルトスロ王宮内の反オランダ急先鋒のひとりであり、主君アマンクラッ2世が王座を回

復するために行ったVOCとの提携を取り消すよう、王に進言し続けている人物だった。かれは娘の希望を聞き入れて娘をウントゥンと結婚させ、ウントゥンを自分の婿にした。こうしてウントゥンはマタラム王家の上層部と交わるようになり、必然的にその内紛に巻き込まれていく。

１６７４年、アマンクラッ2世がまだ皇太子の時期にトゥルノジョヨの反乱が起こった。父王のアマンクラッ１世が鎮圧に努めたが、反乱軍はマカッサルから援軍を得て破竹の進撃を見せ、先王のスルタンアグンが平定したジャワ島北岸部一帯を総なめにしてマタラムの覇権を粉砕した。そしてついに１６７７年、マタラムの王都プレレッ Plered を陥落させてマタラム王宮を踏みにじったのである。アマンクラッ1世は皇太子を連れ、王宮を捨てて北岸地方に逃げた。1世の末子であるパゲランプグルを置き去りにして。

トゥルノジョヨはマドゥラ王家の人質として幼いころからマタラム王宮で成人したマドゥラ人であり、どうしたことか陥落させたプレレッのマタラム王宮を乗っ取ることをせず、クディリに本拠地を置いてそこの支配者になった。[続く]

「奴隷から王に（１０）」（2023年08月22日）

一旦隠れたパゲランプグルが、反乱軍が引き上げたあとの王宮を確保して、対トゥルノジョヨ戦のための軍事力の再構築を図った。一方、逃げた王と皇太子はVOCに頼って反乱を鎮圧し、王座に復帰しようと考えた。ところがアマンクラッ1世はその旅路の途中で没したのである。

皇太子は父王のアイデアを実行に移し、マタラム王国軍を再編してVOC軍と合同させ、トゥルノジョヨの反乱によってマタラムから離反した北岸の諸領主を屈服させた上で、１６７８年９月にクディリのトゥルノジョヨ軍に総攻撃をかけた。

フランソワーズ・タック大尉が指揮する攻撃部隊によって１６７８年１１月にトゥルノジョヨの本拠地は陥落

し、クディリから逃げて山岳地帯をさまよっていたトゥルノジョヨも1679年末にマランのガンタンで捕らえられてVOC軍の捕虜になった。ところがVOC軍はこの捕虜を指揮官お抱えの捕虜として厚遇したのだ。それを見た皇太子は、VOCがトゥルノジョヨと手を組むのではないかと恐れたようだ。もしもそうなれば自分の立場が危うくなる可能性が高い。

1680年1月、トゥルノジョヨが東ジャワのパヤッに住む貴族の家で開かれる宴に招かれた。同じように招かれた皇太子はそこでトゥルノジョヨに会い、自分のクリスを抜いてトゥルノジョヨを刺殺した。

プレレッの王宮から逃げた兄をパゲランプグルは赦せなかったようだ。王宮を放棄して逃げる王がいてたまるか、ということだったのではあるまいか。つまりは、王座に着くべき人間は自分だということだろう。

皇太子はトゥルノジョヨ反乱の根を絶ったその年、1680年にスコハルジョに王宮を建てて王都を移転させた。新王都はカルトスロと名付けられ、かれはすぐにそこでアマンクラッ2世に即位した。こうして兄弟喧嘩はプレレッとカルトスロ間の戦争に発展したが、VOCにバックアップされたアマンクラッ2世に勝てる見込みを失ったパゲランプグルは1681年11月にカルトスロに降伏した。

カルトスロ王宮重臣のヌランクスモの婿になったバリ人のウントゥン・スロパティはアマンクラッ2世に気に入られたようだ。マタラム軍の一翼を担うよう王はウントゥンに命じ、1685年バビロン村に屋敷を与えて王国軍の育成を行わせた。オランダ式の軍事訓練をマスターしたウントゥンとその部下たちは王国軍の強化に大いに貢献したのではないだろうか。

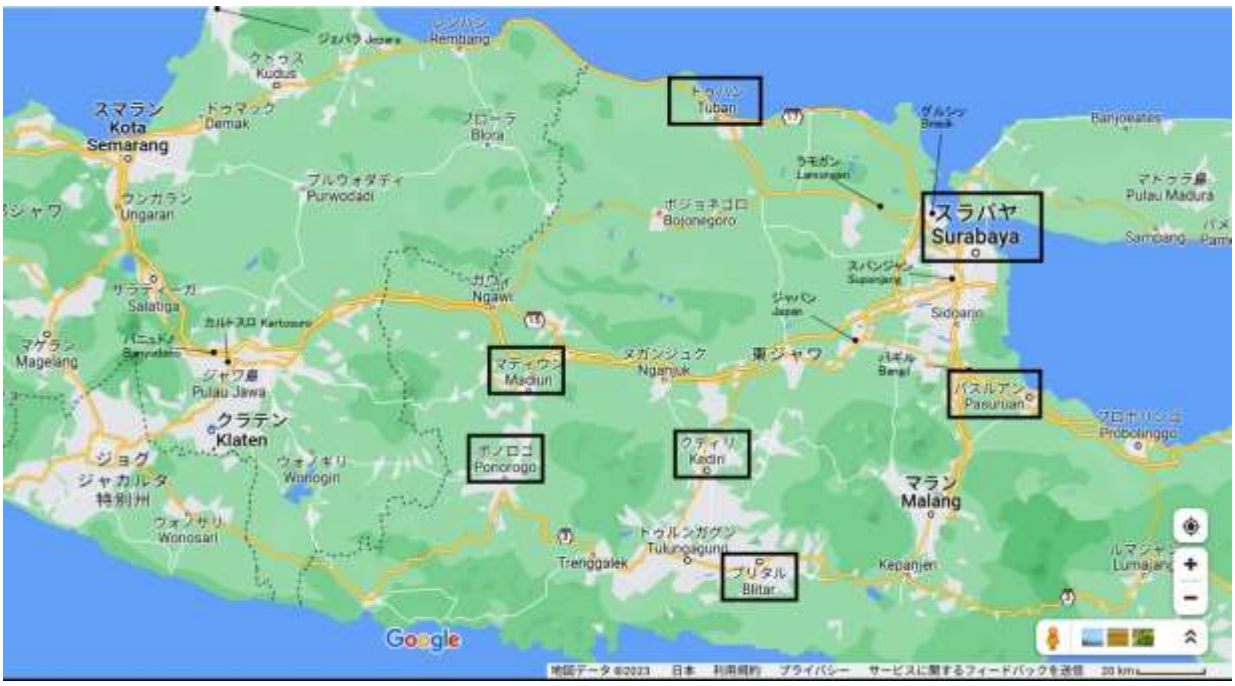
だがVOCにとってのお尋ね者になっているウントゥンの所在をいつまでも闇の中に隠しおおせるはずもない。ウントゥンがどこにいるのかはVOCにも十分わかっていたはずだ。ただし、ジャワの最高権力者の懐に入ったお尋ね者をどのようにして捕まえるかが大問題だったのではあるまいか。それがVOC上層部の悩みになったことだろう。下手なことをしてジャワの王を怒らせたら、政治問題に発展するかもしれない。戦争して負けるとは爪の先ほども思っていないにせよ、また軍事費の支出を大きくしたら経営手腕を問わ

れることになりかねない。VOC会社重役会ヒーレン17はそんな現地経営者の未来を闇の中に閉ざしてしまうだろう。で、VOCはとりあえずアマンクラッ2世に通告した。ウントゥン・スロパティは逃亡犯罪者であるため、当方より派遣する護送部隊に身柄を引き渡していただきたい。

　アマンクラッ2世は板ばさみになった。このたいへん優れた人材を自分の手中につないでおきたい。しかしVOCとの友好関係も損ないたくない。王は考えた末に、芝居を打ってウントゥンを地方に落ち延びさせることにした。そうと決まると、王はVOCに対して、その者の捕縛に協力するという返事を出した。[続く]

「奴隷から王に（１１）」（2023年08月23日）

　1686年2月、フランソワーズ・タック大尉の率いる部隊がカルトスロに到着した。そして王宮に参内してウントゥン引き渡しの手順を話し合い、王の下から退出して王宮の庭に出た。整列している部隊を率いて王宮から出ようとしたとき、突然表門が閉められ、ウントゥン部隊の攻撃が始まった。VOC部隊は全滅し、ウントゥン自らタック大尉の生命を奪った。



バンテンのスルタンアグンティルタヤサとの戦争、トゥルノジョヨの反乱などで活躍し、VOC軍戦力の中枢に置かれていたタック大尉はカルトスロ王宮の庭で生涯を閉じたのである。アマンクラッ2世はVOCへのこの事件の説明を、ウントゥンの反乱と逃亡ということで済ませた。

そしてウントゥンには舅のヌランクスモと共にパスルアンに行くよう指示し、パスルアンの統治者になることに祝福を与えた。パスルアンには王自身が統治者を封じてあったが、ウントゥンのために犠牲にせざるを得ない。

パスルアンの統治者オンゴジョヨはウントゥンとヌランクスモの軍勢が近付いてきたのを知って、スラバヤに逃げた。スラバヤの支配者アディパティジャンラナは実名をオンゴウォンソと言い、オンゴジョヨの弟に当たる。

オンゴウォンソにとってみれば、ウントゥンは兄の支配地を奪った悪党ということになるのだが、ウントゥンとオンゴウォンソはカルトスロで親しくなった間柄であり、しかもパスルアン奪取のシナリオをアマンクラッ2世が作ったことがすぐに解ったから、弟は怒る兄をなだめるだけで、パスルアンを取り戻そうとする動きをまったく示さなかった。

しかし別の歴史解説には、タック部隊は75人の死者を出しただけで、他の兵士は命からがらVOC陣地に逃げ込んだと書かれていて、アマンクラッ2世のVOCへの説明は通りにくいようにも思われるのだが、背信行為という非難はVOC側からアマンクラッ2世に出されなかったようだ。

フランソワーズ・タック大尉の部隊を罠にはめて（多分）全滅させた事件について、こんな話も語られている。

ウントゥン・スロパティをカルトスロ王宮から連れ帰る任務にみんなが尻込みしたため、VOC軍エデーレ・ヒーレ・モール将軍が特別褒賞を与えるという条件を出して希望者を募った。フランソワーズ・タック大尉がそれに応じた。大尉は二個中隊200人を率いてバタヴィアを出発し、海路ジュパラに達して上陸するとカルトスロに向かった。

大尉はジュパラからアマンクラッ2世に使者を送り、ウントゥン・スロパティを引き渡すように要請した。アマンクラッ2世はアリヨシンドゥレジョ、アディパティチョクロニンラ、アディパティジャンラナ、パゲランプグルを集めて対策を相談した。

王国の軍隊がウントゥンを捕らえに行って戦闘し、ウントゥン部隊が王国軍を倒して逃亡するというシナリオでおおよその方向性が決まった。VOC部隊がそこに加わると本当の戦闘になるから、かれらにはその場に行かせないほうがよいということになり、パゲランプグルが細かいシナリオを考えた。

まず、ウントゥンはカルトスロ王宮に仕える人間でなくパティのヌランクスモの私兵であるということにし、パティとウントゥンが王宮に謀反を起こしたという筋立てにする。マドゥラ勢とスラバヤ勢が40人の反乱軍とパサルで戦闘し、それから町のあちこちに移動したあと、反乱軍が王宮に攻め込み、そこにVOC部隊を誘い込んで全滅させるという計画ができあがった。

アマンクラッ2世はタック大尉に、ウントゥンの捕縛はすべてこちらでやるので身柄を引き渡すまでのんびりしていればいい、と連絡した。それを信じたタック大尉の部隊はバニュドノを出てカルトスロのアルナルンにやってきた。アルヨシンドゥレジョがそこにいて、タック大尉の相手をする。

マドゥラとスラバヤの軍勢がパサルに向かった。パサルの方角から銃声や戦闘の音が聞こえてきた。しばらくしてから、伝令がアルヨシンドゥレジョに連絡を持って来た。戦闘に負けて反乱軍を取り逃がしたという内容だ。タック大尉はそれを聞いて出撃命令を出そうとしたがシンドゥレジョに抑えられた。小勢だったから逃がしたが、兵隊はまだたくさんいるから、必ず捕まえる。大尉のお手を煩わすまでもないことだ。[続く]

「奴隷から王に（１２）」（2023年08月24日）

そのあと、聞こえてくる銃声や騒ぐ音は移動していくが、伝令が持って来る報告はいずれも取り逃がしたというものばかり。ペペ川～ブガス～スンダン村とマタラム軍は負けてばかりいる。タック大尉はいらいらし

てきた。口ばかりで頼りにならないジャワ人の軍隊にまかせていては自分の任務が果たせない。

そのあと、王宮から銃声が聞こえ始め、伝令がやってきて反乱軍が王宮に侵入したと言う。タック大尉はVOC軍に出撃を命じた。こうしてタック部隊が罠にはめられたというのがこの話の内容だ。

パスルアンの統治者になったウントゥンはオンゴジョヨの宮殿に入り、その地の領主となってトゥムングンウィロヌゴロを名乗った。一介の奴隷がついに独立領地の王になったのである。反乱を起こして逃亡し、パスルアンを奪ったウントゥン・スロパティという偽りのシナリオを維持するために、アマンクラッ2世は1690年にパスルアンに軍事侵攻して領地を奪回する芝居を打った。そしてマタラム軍は敗戦してすごすごとカルトスロに引き上げた。もちろんその戦争もそういうシナリオの下に行われたものだ。そんなウソの戦争で弾丸に当たって死んだ兵士も憐れなものだ。

パスルアンは、古くはカリンガ王国やムダン王国あるいはマジャパヒッ王国に服属した地方領地であり、イスラム化が始まってからギリ王国の支配下でイスラム教化の一拠点になっていた。イスラム化の過程で乱れたジャワ島の覇権をマタラムスルタン国が掌握し、スルタンアグンがジャワ統一を進めて東部ジャワを平定してから、マタラムに服属する地方領地になった。

アマンクラッ1世がキアイダルモユドをパスルアンのブパティに任じて統治させて以来、ウントゥン・スロパティは第5代目のブパティに当たる。ウントゥンが治めたパスルアンは当時のジャワ島の経済規模においてかなり目立った通商規模を示し、住民は繁栄を楽しんだと言われている。統治行政も支配者の恣意と専制の強くない地方として知られ、周辺のマラン、プロボリンゴ、バニュワギなどに影響を与え、かなり広い範囲で住民生活が向上した。

ウントゥン・スロパティのパトロンだったアマンクラッ2世が1703年に没し、息子のラデンマスティッノがアマンクラッ3世として即位した。ところがアマンクラッ3世は人望がなく、パゲランプグルが王位を継ぐべきだという声が高まったため、1704年に3世はパゲランプグルの一家を皆殺しにしようとして刺客を放

った。パゲランプグルはVOCの保護を求めてスマランに逃げた。

　VOCの支援を得たパゲランプグルは自分の支持者たちの軍勢とVOC軍を合同させて3世を攻め、カルトスロの王宮を奪った。3世はポノロゴに逃げた。１７０５年、パゲランプグルはパクブウォノ１世として即位した。

　ポノロゴに逃げた3世は自分を保護してくれるポノロゴのアディパティに傲慢な姿勢で臨んだ。些細な誤解のために3世がアディパティを折檻したことから、ポノロゴの宮殿と民衆が3世を敵視し始めた。3世は仕方なくマディウンに逃げ、マディウンでも安住できなくなってクディリに移った。

　カルトスロにおけるその変化が、それまでウントゥンを保護していた情勢を大きく転回させることになった。アマンクラッ2世に謀反して王の領地パスルアンを奪い、独立王国を築いた形に表向きはなっていても、裏では2世が自分の手駒としてパスルアンに置いた同盟者がウントゥンなのであり、2世の存在がパスルアンに向けられる銃口の前に立ちはだかっていたのだ。2世が没したあとも、3世が賢明な君主であればその形が継続し得た可能性も想像されるが、歴史にもしもを訪ねるのは愚行だろう。[続く]

「奴隷から王に（１３）」（2023年08月25日）

　これは言ってみればアマンクラッ2世～3世の筋につながるウントゥンという派閥構造と解釈されるわけで、つまりはカルトスロがパクブウォノ１世の派閥に握られたとき、VOCにウントゥン撃滅の機会が開かれたということになるのではないだろうか。パクブウォノ１世自身がウントゥンを積極的に滅ぼしたかったのかどうかはよくわからないものの、パクブウォノ１世を王座に着かせたVOCがウントゥン撃滅の旗を振ればもはやその意向をそらしてまでウントゥンをかばおうとする気がパクブウォノ１世に起こらなかったことは推察されるにあまりある。

　アマンクラッ2世に随順していたスラバヤもマドゥラも、アマンクラッ3世からパクブウォノ１世に忠誠を移し替えた。アマンクラッ2世の下でどれほど親しく交際した経緯があっても、主君がVOCの号令を受けてパ

スルアン攻略の命をスラバヤやマドゥラのアディパティに下せば、かれらはウントゥンの敵にならざるをえない。

１706年９月、ホーヴァート・クノール少佐の指揮下にVOC軍を中心に据えたカルトスロ・マドゥラ・スラバヤの大軍がパスルアンを目指した。パスルアン軍はスラバヤとの領境に近いバギル村の要塞で防戦する。そして1706年10月17日の戦闘で、パスルアン軍の総指揮官トゥムングンウィロヌゴロは銃弾を受けて戦死した。

死に際してウントゥンは息子たちと重臣に、自分の死を秘匿するよう命じた。遺体は土に埋められたが墓標も盛り土もない墓だった。ウントゥンの陣頭指揮がなくなってもパスルアン軍の抗戦は続き、担架に偽物ウントゥンを載せて後退して行くパスルアン軍の姿がVOCの目に映った。

ニコリナ・スロートの小説はウントゥンの最期を次のように描いている。しかしロバートが登場していて話の経緯がどうしても必要になるため、最期に至る経緯を知っておいていただくほうがわかりやすいのではあるまいか。ということで、その経緯からまず話を始めようと思う。

オンゴジョヨの宮殿は美しく壮大で、強固な王国の王宮としてふさわしいものだった。ウントゥンは宮殿のシティンギルにつながっている自分の執務室を好みの様式に変えた。シティンギルとは王が接見のために座る玉座の置かれた大広間のことである。王宮でない場合はプンドポと呼ばれる。

ウントゥン自身は自分を実質的に国王と考えているが、対外的には一地方領主という体裁を取っている。だから自分をトゥムングンとしか呼ばないわけだ。その方がマタラム王宮との関係で人心の感情面に配慮していることになるようにわたしには思われる。

ウントゥンの執務室はオランダ風のスタイルに変えられた。スラバヤで作らせたオランダ調の素晴らしい家具が置かれ、壁には虎や鹿の頭のはく製、そしてさまざまな武器が飾られている。この部屋に入ることができるのはウントゥンにきわめて身近なひとびとだけであり、家族以外ではアミラン・クスモ、キアインブ

ン、ウィラユダなどほんの数人しかいなかった。

その日、クディリとスラバヤから来た使者を接見したあと、ウントゥンはテンゲルで王子に刃向かった者たちを裁くために被告たちをプンドポに連れて来させた。重い鉄鎖を手に付けられた被告たちは牢獄の看守長に連れられてやってくると、プンドポの端でひざまずき、プンドポの中央にいざり寄って来た。ところがひとりだけ、ひざまずかないで立ったままの者がいる。看守長が手に持った棒でその若者をひざまずかせようとしたが、若者は従おうとしない。「わたしはイスラム教徒でなく、キリスト教徒だ。キリスト教徒がひざまずくのは神だけだ。神でない人間にひざまずくことはしない。その棒でわたしを打って殺すがいい。そうすればわたしはいざって進むようなことをしなくて済む。わたしは人間だ。けだものではない。人間はけだもののような歩き方をしない。」

［ 続く ］

「奴隷から王に（１４）」（2023年08月28日）

ウントゥンは看守長に「椅子を与えて座らせよ。」と命じ、その若者から尋問を始めた。ウントゥンはこの若者をVOCのスパイだと見た。パスルアンの内情を探っておき、攻撃を開始したときに兵の動きを効果的にするのが目的だろう。

その推測は外れていなかったものの、証拠は何もない。聡明で度胸のあるその若者を拷問にかけて殺すには惜しいとウントゥンは思った。若者は自分の身の上を正直に答え、自分はオランダ人の母を持つプラナカンだと言い、母の宗教に従ったと語った。父親をまったく知らず、母も小さいころに失ったので、両親について自分は何も知らないと物語る。

被告たちからテンゲルでのできごとに関する証言を聞いて、ウントゥンは事件の真相を察した。村娘を

襲っている十人ほどの男たちをそのキリスト教徒の若者がピストルで追い払ったというだけの事件であり、娘を襲った男たちの中心にルンボノ王子がいたということがこの事件の核心だったのだ。一旦逃げた王子は兵隊を連れて引き返し、その若者とそこにいた村人たちを王子に害をなそうとしたという理由で捕らえたのがこの事件のようだ。

ウントゥンは息子のルンボノにも証言させたが、話のつじつまが合わない。わが息子への怒りでたいへん不愉快になったウントゥンは判決を明日下すことにしてその法廷を閉じた。

ジャワ文化の中で育った息子たちとキリスト教徒の若者の人格の違いが今さらのようにウントゥンに感銘をもたらした。人間というのはどうあらねばならないのか、どのように生きるのが人間の務めなのか、それを息子たちはまるで解っていない。聖地に参詣に行くなどと言いながら、やっていることはせいぜい村娘を手籠めにするくらいだ。

それに反して西洋文化の中で育ったあの若者は、弱い女が困っているのを見たとき、自分が何をしなければならないのかを十分に理解しており、しかもそれを実践する勇気を持っていた。自分が何であり、何を望み、何の義務を負っているのかを知っている。人間にとって名誉とは何であるのかを知っているのだ。ウントゥンは大きくため息をついた。

そして自分の左手に持っている、さっきの若者が首からかけていた布袋に注意を向けた。さっきの若者が牢獄に入るときにすべての持物が取り上げられたが、この身に着けていた袋だけは渡そうとしなかった。「これは自分にとって生命と同じくらい大切なものだが、他人には何の意味もないものだ。これを調べたいなら、裁判官にだけ見ていただき、またわたしに返してほしい。もしも死刑になるのなら、必ずこれを一緒に墓に入れていただきたい。」若者はそう看守長に語った。ここからスパイの証拠が出て来るかどうか、調べてみよう。

ウントゥンは中身を出して机に置いた。手紙が数枚、ふたつに折られた銀貨の片割れ、女性の肖像画、

乾燥した花びらが数個、青いリボンの切れ端。手紙は女の手で書かれた愛を語るラブレターだ。あの若者の仕事を物語るものはひとつもない。ところが女性の肖像画を見つめたウントゥンは顔色が蒼白になり、すぐに銀貨の片割れを手にして感触を確かめた。そして棚に置いてある小箱のひとつを持ってきて、その中にある銀貨の片割れを机に置いた。かれは震える指先でふたつの片割れを近づけ、そして併せた。ふたつは寸分の隙間もなく一体になって、割られる前の状態に再現された。

目をみはったウントゥンはしばらく呆然とたたずんでいたが、椅子に崩れ落ちてつぶやいた。「おお、神よ。こんなことが起こるのか？スザンナの子供がわしのところにやって来た。」[続く]

「奴隷から王に（１５）」（2023年08月29日）

ウントゥンは落ち着きを取り戻すと牢獄に向かった。王が衛兵も連れずに自ら牢獄に入って来たのだから、看守長が驚いた。眠っているキリスト教徒の若者の顔を細かく探るように見ていると、若者が身体を動かして鎖が音を立てたために目を覚ました。若者は王が自分のそばにいるのを見て、処刑されると思ったようだ。

ウントゥンは手にした鉄の棒で鎖の輪のひとつを外し、この者に尋ねたいことがあるので連れて行く、と看守長に言ってふたり一緒に牢獄を出た。自分の執務室に連れて行って、若者の形見の品について細かく尋ねた。そしてこの若者がウントゥンとスザンナの子供のロバートであることがはっきりした。ロバートは自分の実の父親の名が奴隷のウントゥンであることを知っていたが、自分の目の前にいる一国一城の主がその奴隷のウントゥンと同一人物であることをすぐには信じられないでいた。奴隷のウントゥンは愛するディグナの父を殺した非道な男なのだ。だが目の前にいるこの王はそんな薄っぺらいイメージよりもはるかに奥行きが深く、重厚な内容を持った、山のようにどっしりとした人間の姿を示している。

結局ロバートは、割られた銀貨のふたつの片割れからそれが事実であることを確信せざるを得なくなった。しかしロバートは実の父親との邂逅をすなおに喜ぶことができない。ロバートの心の中をさまざまな思

いが去来する。

母は自分を産んでから、持ち込まれてくる縁談をすべて断って、ただその奴隷のことを思いながらわびしく死んでいったというのに、その思い焦がれた男は別の女を妻にして広大な領地の王にのし上がり、栄耀栄華の暮らしをしている。ロバートはその非難を父親にぶつけた。

「クフェラーの副官はどこへ行った？スザンナ・モールはクフェラーの副官と結婚したと聞いて、わしはスザンナとの人生を諦めた。グシッ・クスモを妻にしてマタラム王宮に関わるようになったのはその後だ。」

「クフェラーという名前は一度も聞いたことがありません。わたしを育ててくれたひとびとから聞いた母についての話は、わたしが申し上げた通りです。」

ウントゥンの心に怒りが湧いた。

「そうだったのか。わしは信頼する人間に嘘をつかれて、それを信じてしまったようだ。わしのスザンナへの気持ちにも偽りはない。その銀貨の片割れをスザンナの思い出にして、わしはいつもそれを身の回りに置いてきたのだ。おまえに信じてもらえるだろうか？」

アミラン・クスモの宮殿の客になっている間に、自分に対して行われた陰謀をウントゥンはいま覚った。ウントゥンが尊敬するキアインブンたちがウントゥンの心からスザンナの影を消すことを図り、大勢がそれに協力して企てを成功させた。裏でその糸を引いたのがグシッ・クスモだったことは明白だった。わしは他人に操られてこの人生を送って来たのだろうか？ウントゥンの怒りは哀しみの色を帯び始めた。

だがロバートの心の中でもつれた糸はまだかれに喜びをもたらさない。愛するディグナの仇ということだけでなく、自分をその一部に包み込んでいるとかれが感じているオランダと、そしてウィロヌゴロを撃滅するべき大敵の位置に置いてその敵情を探るために自分に任務を与えたVOCへの忠誠心がかれの心中にわだかまり続けている。自分はどうすればいいのだろうか。[続く]

「奴隷から王に（１６）」（2023年08月30日）

反対にウントゥンには新たな希望が湧きおこった。この国で自分が行ってきた統治は自分の一代で終わり、王子たちのだれが自分の座に取って代わっても、この国の将来は衰退の一途をたどるだろう。そう諦めていたウントゥンに一条の希望の光が差し込んだのである。ロバートなら、わしの代わりが務まる。だが父親との邂逅に喜びの感情をほとばしらせないロバートの姿からウントゥンはロバートの心中の葛藤を察した。ロバートを説得してみるしかあるまい。それには時間が必要だ。

ロバートをしばらく王宮に置いて、折を見てロバートが自分の長男であることを明らかにし、かれを王位継承者に指名することにしよう。すると当然、今や王妃となっているグシッ・クスモと子供たちの敵になる。しばらくは何も言わないままわしの傍らにロバートを侍らせて王の仕事に付き添わせるだけでいいだろう。

ロバートは最悪な環境の牢獄から、最高の環境である王宮の客室のひとつに移された。ウントゥンはかれに注意を与えた。わしが与える飲食物以外を決して口にしてはならない。わしが居るところでなければ、だれも客に迎えてはならない。鎖帷子を用意させるので、おまえは衣服の下に常にそれを身に着けよ。

そして頼みをひとつ付け加えた。おまえが上官への報告義務を果たすためにここを去りたいと思っても、わしに無断で逃げ出すようなことをしないでほしい。ロバートは言う。

「わたしは自由の身ではないということですね？」

「わしは自分の息子を牢獄につないで拘束したいと思わない。これは親子としての頼み事だ。わしはおまえの意志を尊重したい。おまえが自分の生きる道を自分で選択するのは自由だ。それを阻むようなことをわしはしたくない。おまえが去るなら去るでかまわない。ただ、そのけじめだけをつけておきたいのだ。」

ロバートは父親の心を受け入れた。

それから毎日、ウントゥンはロバートを連れて国内の軍備を見て回り、自分の行う政務を見せて説明し、大臣たちの報告の場にも立ち会わせた。グシッ・クスモと王子たち、そして諸大臣もその若者がだれである

のかを既に感づいていて、ロバートがだれなのかを尋ねる者はいなかった。ウントゥンがひと言も説明しないにもかかわらずだ。

ウントゥンはロバートに自分の後継者としての教育をしていたのだが、VOCを蹴ってウィロヌゴロの地位を継ぐ気持ちはロバートになかった。自分をVOCのスパイだと知りながら父はなぜこのようなことをするのか、ロバートには解せない。もしも自分が知ったことをすべてVOCに報告したら父はどうするのか、そんなことをそこはかとなく尋ねてみた。父親はこう語った。自分が亡き後、この国の統治はお前のような人間が行うほうがよい。それがお前でなくて他のオランダ人であってもかまわない。そのほうがこの土地の民にとってはよりよい結果になるだろう。

ロバートは思った。父は間もなく起こる戦争に負けると判断している。どうせ負けるのなら、国内の軍事機密が敵に知られても同じ結果になるだけの話だ。負ければ父の生命はあるまい。自分の死後、父はオランダ風の統治がこの地でなされることを望んでいる。VOCが勝ったとして、パスルアンの統治体制がどうなるのかは自分が予想できるものではないが、父は自分の希望をわたしに伝えようとしている。

もしも自分が父に就いて一緒に戦争すれば、父は総力をあげて戦争に勝つように努めるだろう。それでも結果がどうなるか判らない。負ければ今父が抱いている希望は一抹の泡となって消えるだけだ。自分が一緒に泡となって消えるのは構わないが、この戦争に勝っても負けても自分はオランダにとって裏切り者になる。自分にはそれができない。ディグナのためにも。[続く]

「奴隷から王に（17）」（2023年08月31日）

パスルアン征伐のためにVOC軍1万5千人がバタヴィアを発してスラバヤに上陸したという噂がかまびすしくなった。スラバヤに待機していたマドゥラ軍とスラバヤの軍勢が一緒になってまもなくパスルアンに向けて進軍を始めるだろう。戦争が始まる。世の中が戦々恐々とし始めた。しかしウィロヌゴロは勝算のある顔をしてゆったりと構えている。敵の進発はまだだ、とかれは予言者のようにパスルアン軍の幹部たちに

言った。それもそのはずで、スラバヤのアディパティであるオンゴウォンソがかれに内通していたのだから。

老齢のマドゥラのアディパティが、月が満ちるまで進発しないと言い張っている。その状況をスラバヤからの密使が伝えてきた。オンゴウォンソはウィロヌゴロに、今回のパスルアン進攻で自分がどのような行動を執るかについて、先に知らせてあった。自分は戦場に出ず、他の者がスラバヤ軍を率いて従軍する。かれらは最悪の道案内人になり、困難な道を時間をかけて通過した後、バギルに近い湿地帯に踏み込む。そこを攻められたら万余の軍勢も総崩れだろう。

このパスルアン進攻にウントゥンはそれほど不安を感じていなかった。それよりもっとかれが心配したのは、国内統治体制が崩れ始めたことだ。妃のグシッ・クスモがロバートの排斥に動き出したのだ。王子たちは元より、政治軍事の要職者たちも、王子を襲ったVOCのスパイが王を口車に乗せ、パスルアンをVOCに売り渡すように仕向けているという印象を抱いた。要職にあるキアイがあちこちで王の批判を語るようになり、ジャワ人もバリ人も行政官から軍人に至るまで、王の失態を批判して王の命令に不服従の態度を示す者が増加した。王の妃がそのありさまをまるで増長させるかのようにふるまっている。この国は戦争に負ける前に内部崩壊してしまうだろう。ウントゥンは戦争が早く始まることを望んだ。戦争が始まれば、内部崩壊の動きは止まるだろうから。

１７０６年９月、スラバヤのアルナルンに１万５千人を超える大軍勢が整列した。馬上でその大軍を指揮するホーヴァート・クノール少佐の直属参謀としてファン・ベルヘン大尉が付添い、VOCスラバヤ駐屯軍の士官たちがそれぞれ一個旅団を率いる。兵士はオランダ人・ジャワ人・バリ人・アンボン人・ブギス人・マカッサル人が入り混じっている。

次いで１千人を超えるマドゥラの軍勢が、老齢のアディパティに率いられて並ぶ。軍勢の先頭に立つのはスムヌップとパムカサンの王族たちだ。アディパティのすぐ後ろに黄金の槍がきらめいている。そして最後に連なるのがスラバヤの軍勢だ。兵士たちはアディパティ配下のレヘントに率いられている。VOCはたくさんの大砲を用意した。その大砲と弾薬、そして食糧などの軍需物資をパスルアンまで運ぶために水牛２百頭、クーリー５千人が軍勢の後に付き従う。

総指揮官の訓辞が終わると、この大軍は進発前の腹ごしらえに入った。スラバヤには食糧がたっぷりあるから、そこに集まっている膨大な量の胃袋を満たすことなど造作もない。

ジュパラの王女だったアディパティの妻のラデンアユは心優しく細やかな女性だったから、このたいへんな量の食べ物を料理したり果実を用意したりするためにこれまた一軍勢ほどの女たちを指揮して美味な食事を一兵卒にいたるまでたっぷりと賞味させてくれた。この大宴会の間中、アルナルンの一角に陣取ったガムランの楽団が奏でる音楽が空中に満ち満ちた。

軍勢の指揮官たちが入れ替わり立ち代わり、アディパティジャンラナのご機嫌伺いにやってくる。笑い声がはじけ、ワイングラスを触れ合わせる音が続く。そうやって楽しそうに振舞っていたオンゴウォンソの顔が突然蒼白になり、手が震えて飲み物を服の上にこぼしてしまった。そばにいたアディパティマドゥラがそれを見て大声で笑った。

「飲みすぎだよ。進軍に同行しないからと言って、そう飲みすぎちゃよくない。」

だがそれに答えず、オンゴウォンソの目は食べ物をそこに運んで来た壮年の奴隷の顔を盗み見て何かつぶやいた。

「こんな危ないことをするとは、なんと向こう見ずな・・・」

「なんの、殿様。たいしたことじゃありません。」奴隷はちょっと低目の、しかし普通の声で言った。そんなオンゴウォンソと奴隷のやり取りに注意を向けた者はひとりもいなかった。[続く]

「奴隷から王に（１８）」（2023年09月01日）

その奴隷は食べ物を一座のひとびとに捧げ、それが終わるともうひとりの奴隷に声をかけ、ホーヴァート・クノール少佐の席の後に回って他の奴隷たちと一緒に立った。少佐はアディパティマドゥラと作戦の事について話していた。オンゴウォンソを驚かせた奴隷がそこで聞き耳を立てていることなど、だれひとり感づいた者はいない。オンゴウォンソひとりだけを除いて。

クノール少佐が立ち上がってテントの外に出た。食事は終わりだ。そろそろ出陣が始まるだろう。オンゴウォンソも立ち上がってテントの外へ出て、人の少ない方角へ進んだ。さっきの奴隷ももうひとりと一緒にオンゴウォンソが行った方角に向かった。

周囲に誰もいない場所でオンゴウォンソがぶらぶらしていると、さっきのふたりの奴隷が近付いてきた。オンゴウォンソが大柄な奴隷に話しかける。

「あんたに笑われてもしかたないが、わたしは卒倒するところだった。こんなところまで、よくもやって来れるものだ。もしもここで捕まったら、戦争にならないだろう。あんたはなんでこんなことをするんだ、ウォンソヌゴロ？」

「わしは今でも奴隷の使用人が務まるようだ。昔、トアンモールの家でやっていたことを思い出したよ。もしもあんたがオランダ人やマドゥラの爺さんと一緒にわしを滅ぼしたければ、わしは簡単にあんたの捕虜になっただろう。」

「そんなことを言わないでくれ。オランダ人もマドゥラも滅びなければならない。かれらと正面から太刀打ちできるのはあんたしかいない。わたしの立場にも少しは配慮してくれ。あんたもわたしも、危険な立場に立っているのだから。」

「その通りだ。わしは一刻も早く戻らなければならないから、これで失礼する。さあ、ウィラユダ、行こう。」

ふたりが立ち去るのを見送ってから、オンゴウォンソはアルナルンに向かった。

パスルアンへの道中で、バタヴィア市庁舎から脱獄して以来、ウントゥンの腹心の部下になったウィラユダに、ウントゥンはロバートのことを打ち明けた。そしてもし自分の身に何かが起こったとき、ロバートの身柄を保護してやってくれ、とウントゥンはウィラユダに依頼した。妻と息子たちがロバートの生命を狙っているのだ。ウィラユダは兄貴分の頼みを引き受けた。

スラバヤを出発したパスルアン進攻軍はバギルの村はずれに位置するデルモの水田地区で動きを止めた。そこに到達するまで、進攻軍は湿地帯の泥の中をぬけ、川を渡り、養魚池を越え、時には橋をかけて進軍した。既にへとへとに疲れ切り、食糧も不足していた。荷駄隊にたくさんの落伍者が出たのだ。重い大砲は何とかデルモの野営地まで運び込まれたが、クーリーはそれ以上進むことを嫌がった。スラバヤのレヘントがわざと通りにくい行程を選んでみんなをへとへとにさせたという声があちこちで出た。

デルモからパスルアンに向かう道を探しに出たスラバヤ軍部隊がパスルアン軍の攻撃を受けて大きい損害を出した。１４０人あまりが戦死し、パスルアン軍はバリ人が７０人ほど死んだ。

１０月１６日午前6時半、進攻軍がバギル要塞に総攻撃をかけた。マドゥラ軍が左翼、デベフェレ部隊が右翼、ファンデルフエットとカピテンビンタン部隊が中央という陣形で攻め立てる。激しい戦闘が各所で展開されたが、要塞はまだどこも破られない。攻撃が三回行われて三回とも持ちこたえられ、攻撃側は一旦攻撃を休んで要塞を遠巻きにした。

三回目の攻撃が終わったあと、ウントゥンが馬から落ちた。バリ人兵士がすぐにウントゥンを取り巻いた。その様子は攻撃側からも見えた。しかしウントゥンは立ち上がるとまた兵隊に指示を与えている。そして敵の目から見えない場所まで歩いてから地面に崩れ落ちた。背中に砲弾の破片を受けただけでなく、腹部がぐっしょりと血に濡れているのだ。

ルンボノ王子が飛んで来た。ウントゥンは「わしに代わって指揮を執れ。ただしわしが重傷を負ったことを誰にも知られてはならない。」とルンボノに言い、自分の身を奥に運ばせた。そして担架に乗せてパスルアンの宮殿に運ぶよう命じた。[続く]

「奴隷から王に（１９）」（2023年09月04日）

指揮官が入れ替わったバギル要塞は次の攻撃で陥落した。攻撃軍がパスルアンに攻め込んでくると誰もが考え、パスルアンでは大勢の住民が町から逃げ出した。だが雨季が始まったのだ。激しい雨が降り始めた。

クノール少佐は戦闘行動の困難さ、傷病兵の多さ、そしてアディパティスラバヤの裏切りの可能性などを勘案して、パスルアンへの進撃を躊躇した。そこにきて、アディパティマドゥラが帰還を言い張り、またパスルアン軍の別動隊がスラバヤに攻撃をかけるという噂も出てきたために全軍をスラバヤに戻すことを決めた。パスルアンは戦火から免れたのである。ウントゥンは担架で宮殿まで戻ることができた。

夫が重傷で戻って来たという報告を聞いて、グシッ・クスモが急いで見舞いに来た。ウントゥンは死に往く者の最期の頼みを聞いてくれと妻に言い、グシッ・クスモは夫の頼みに従うことを約束した。それはロバートが自分を後継することを承知した時のための伏線だったようだ。ウントゥンは傍にいる者にロバートを牢獄からここに連れて来るよう命じ、ロバートが来たのでグシッ・クスモにその場を外させた。

自分の後継者になってこの国を統治してほしいとウントゥンは最期の頼みをロバートにぶつけた。だがロバートは死に瀕している父の頼みに従うことができなかった。ロバートは自分を形作ったオランダから離れることができなかったのだ。一国一城の主になり栄耀栄華の暮らしを送るということが、かれをオランダから引き離すだけの価値を持っていなかったということになるのだろう。自分の安住の地がどこであるかということがロバートにはよく分かっていたにちがいあるまい。

ウントゥンはロバートを去らせ、ロバートはウィラユダの案内でトサリに向かい、そこに身を隠した。そしてしばらくしてから地元民に身をやつして父の墓参りをし、そのあとバタヴィアに向かった。

バタヴィアのVOCはウントゥンが死んだことを喜んだ。しかしクノール少佐がバギルからパスルアンへ

進攻しなかったことが問題にされた。同時にアディパティスラバヤの姿勢も問題にされた。背信の容疑だ。

パスルアンではウィロヌゴロの三人の王子が遺産をめぐって激しく対立し、紛争が起こったのでブランバガンがパスルアンを属領にした。ブランバガンとは今のバニュワギにできた王国で、ジャワ島イスラム化の最後までヒンドゥ王国として生き残っていた国だ。

１707年、バタヴィアのVOCはパスルアン攻略をヘルマン・デ・ヴィルデに命じた。かれはスザンナに恋した男のひとりであり、スザンナの心がウントゥンに奪われてしまったために怨恨を抱き続けていた。

７月１８日にVOC軍はカルトスロを出発し、ソロ川ブランタス川を経てクディリを攻め、アマンクラット３世はスラバヤに逃げた。VOC軍は続いてパスルアンに向かい、領内に攻め込んだ。ロバートはパスルアン領内の地理と軍備の詳細を指揮官に教えてVOC側の戦果を高めるのに貢献した。

ところがデ・ヴィルデは遺恨を晴らすためにウントゥンの墓をあばき、遺骸を掘り出してアルナルンで焼き、灰を海に捨てさせたのである。ロバートの心中はどんな思いで満たされただろうか。軍事征服されたパスルアンはパクブウォノ１世の領地に戻された。アマンクラット３世はマランに移り、ウントゥンの息子たちと一緒になってパクブウォノ１世に対する反抗闘争を続けた。[続く]

「奴隷から王に（終）」（2023年09月05日）

ウントゥン・スロパティとグシッ・クスモの間に生まれた子供たちはラデンプガンティン、ラデンスロパティ、ラデンスラディラガ、マサユグンディンの四人だ。娘のマサユグンディンはブランバガンの王プラブダヌレジョの妃になった。

小説ではバカ殿に描かれた王子たちだが、かれらは父に仕えた信奉者を率いてアマンクラット３世を奉じ、VOCとパクブウォノ１世の爪から３世を護ることに努めた。その旧スロパティ軍はジャワ人とバリ人の

混成軍団だった。

マランに本拠を置いた3世は病に冒されて不自由な身体になり、VOCとカルトスロ連合軍の攻撃に抗しきれずブリタルに逃げ、さらにクディリに移り、最後にスラバヤで1708年に降伏した。そしてバタヴィアに移され、さらにスリランカに流刑された[14]。スロパティの王子たちの中に、3世の降伏に従ってVOCに捕らえられ一緒にスリランカに流された者がいる。3世は1734年にスリランカで没したと記されているが、スロパティの王子の話は見当たらない。

ウントゥン・スロパティが死に、アマンクラット3世が流刑されたあと、VOCは大掃除を進めたようだ。1709年になってスラバヤのアディパティジャンラナが1706年のパスルアン進攻の際にパスルアンに内通していたことをパクブウォノ1世に報告したのである。スラバヤの中から反VOC姿勢を完璧に消滅させる意図でなされたことは明白だったが、パクブウォノ1世はVOCに操られざるを得なかった。

取調べが行われ、あのときスラバヤ軍が本気で戦争しようとしていなかったことが明らかにされた。そんな部下が処刑されるのはジャワの作法ではないかとVOCに迫られたパクブウォノ1世は操られるままに動いた。1709年、オンゴウォンソはカルトスロの死刑執行人が手にしたクリスの一突きによってスロパティの後を追った。

オンゴウォンソの処刑のあと、スラバヤの統治が乱れた。年上のアルヨジョヨプスピトと下の弟ガベイジャンラナのふたりの弟の間で支配権が争われ、そして領地分割が行われた。1714年にアルヨジョヨプスピトはパクブウォノ1世の王宮に参内することをやめた。それは造反の意思表示を意味している。そしてかれはグルシッ、トゥバン、ラモガンを味方に引き入れてカルトスロから離反させた。

1717年、ふたりはパクブウォノ1世に対して武力蜂起を行った。このスラバヤ反乱軍には旧スロパティ

---

[14] スリランカのコロンボに当時あった島にオランダの奴隷集積所があった。この近くの駅は Slave Island という名前であったが現在は Komapannavidiya と改称されている。

軍の生き残りバリ人が多数加わっている。それをスロパティの王子たちが率いていたような話もある。VOCカルトスロ連合軍はスラバヤに進攻してスパンジャンに布陣した。その戦争でガベイジャンラナが戦死した。攻撃を支えきれなくなったジョヨプスピトはモジョクルトのジャパン村に逃げた。スラバヤはパクブウォノ１世の手に戻った。

ジョヨプスピトは１７１９年に起こったカルトスロに対するパゲランブリタルの反乱を支援してカルトスロに刃を向けている。そのときパクブウォノ1世は死去して息子のアマンクラッ4世が即位したばかりだった。

ジョヨプスピトは１７２３年に病気で死亡し、ジョヨプスピトの反乱はその年に幕を閉じた。その結果VOCに捕らえられたスロパティの王子がスリランカに流刑されたという話を書いている資料もある。

ウントゥン・スロパティの三人の王子がそれぞれどんな運命をたどったのかについては、それを物語る資料を見つけることができなかった。

ウントゥン・スロパティについては、時のオルバ政府[15]が１９７５年１１月３日付の大統領決定書第106/TK/1975 号で国家英雄に叙した。

現在首都ジャカルタの高級住宅街メンテン地区のディポヌゴロ通り北側の公園にスロパティ公園の名が与えられている。その命名は共和国独立後ほどなくなされたそうで、国家英雄叙勲よりもだいぶ前のことになる。大多数のインドネシア国民にとって、ウントゥン・スロパティの名は反オランダ闘争の元勲のイメージが圧倒的に強いにちがいあるまい。

それを西洋文明に開眼したひとりのプリブミという形で描いたニコリナ・スロートの小説をわれわれはどんな角度から見ればよいのか、意見が衝突するところだろう。[完]

---

[15] スハルト政権